

痛みのお医者さん

ペインクリニック



長谷川義隆さん

最近、医療機関の看板に「ペインクリニック」の文字を見かけるようになりまし。ペインは日本語で「痛み」。直訳すると、「痛みのお医者さん」ですが、実際にどんな症状で受診したらよいのか分からない人もいます。「痛みを我慢すると、さらに痛みが広がって悪循環に陥ります。早めの対処が大事です」と呼び掛ける吉岡町大久保、「痛みのクリニック」長谷川医院の院長長谷川義隆さんにペインクリニックについて聞きました。

麻酔科の分野

ペインクリニックは痛みの診断と治療をする麻酔科の専門分野の一つです。病院にある総合診療科は、この診療科に行けばよいから分らない」という患者さんの訴える症状と、問診、検査で病気を見つけます。これに似ていて、痛みを部位別ではなく、体をあらゆる角度から捉える「痛みの総合診療科」といえます。

痛みは誰もが日常生活の中で経験する感覚です。不快なものですが、体の内外の異常事態を知らせる警告反応という大切な役割があります。

ぎっくり腰やスポーツのけが、下痢を伴う腹痛などの急性の痛みと慢性の痛みがあります。

筋肉が緊張する
血管が収縮する
血液循環が悪くなる

発痛物質が出る



「我慢すると、新たな痛みが発生」

す。けがや手術の後の長引く痛み、加齢で生じた関節や骨の変形による腰や膝の痛み、がんやリウマチの痛みなどは慢性の痛みです。

原因別には3種類に分けられます。やけどや外傷による「侵害受容性の痛み」の多くは急性で、消炎鎮痛作用があるロキソニンなどの飲み薬や湿布が効きます。神経障害性の痛みは、ヒリヒリ、チクチクする軽い痛みから、焼けつくような痛み、刺すような痛み、電気ショックを受けたいような痛みまであり、消炎鎮痛剤は全く効きません。代表的な疾患に帯状疱疹後の神経痛が

神経ブロック療法

痛みは我慢するものではありません。痛みが新たな痛みを招き、悪循環に陥ってしまいます。例えば肩が凝って痛くなると、筋肉が緊張して血液循環が悪くなり、酸素や栄養が滞ります。すると発痛物質が生じ、さらに痛みが強くなります。

治療の基本は神経ブロック療法。昔から日本人は我慢することを美德と考えがちですが、痛みに限っては早く断ち切ることが肝心です。苦痛はできるだけ軽いうちに取除きましょう。

悪循環を断ち切る

出番多い漢方

治療の対象は頭から足の先までの「あらゆる痛み」です。頭痛全般、首や肩の張りや痛み（肩こり）、五十肩、おち打ち症など、腰・下肢の痛み、膝の痛み、全身に強い痛みが出る線維筋痛症、精神・気分障害による痛み、具体的な痛みの場所が分からないケースにも対応します。つらい期間が長びくと、生活の質（QOL）や日常生活動作（ADL）が低下するだけでなく、気分も落ち込みます。同時に家族など周囲の人も苦しめます。早めに受診することが大事です。

法と薬物療法の2本立てです。痛みの電気信号が脳に伝わらないよう、神経を一時的に遮断する神経ブロック療法は、迅速に痛みを取り除きます。仕事などに早く復帰でき、お年寄りが痛みから寝たきりになるのを防ぎます。最近ではペインクリニック診療に漢方治療が欠かせなくなりました。①慢性の痛みを抱える患者の増加②患者の高齢化③西洋医学で対処困難な病態の増加④西洋医学の薬に比べて少ない副作用⑤漢方治療の有効性・有用性の高まりなどが理由です。

多くの患者さんは痛みから解放されたい一心でペインクリニックを受診しますが、的確な診断なくして適切な治療を行うことはできません。医師として重要なのは共感を持って、じっくりと患者さんの痛みについて聞くことに尽きます。既往症や現在にかかっている他の病気なども痛みの診断につながるがあるので、受診時に「お薬手帳」を持参することをお願いしています。

寝たきり防ぐ効果も

神経ブロック療法は、神経の興奮伝導を一時的に遮断して痛みを取る方法です。皮膚から神経または神経の近くに注射針を刺したり、背骨の中の神経が集まっている部位に薬液を注入して治療します。最も多く使われるのは局所麻酔薬。歯の治療で使うのと同じものです。疾患、年齢、部位などにより、麻酔薬の濃度や量を変えて使います。

2、3時間しか効果がない局所麻酔薬で、慢性の痛みが取れるのを不思議に思われる人もいます。その理由は、悪循環に陥っている痛みの反射路を神経ブロックによって断ち切ると同時に、緊張していた血管が広がることで発痛物質が洗い出され、元の痛みがなかった状態に戻せるからです。

高齢になると糖尿病や高血圧などの慢性疾患を抱え、複数の薬を服用するようになります。またさまざまな場所に痛みが出現します。このようなケースでも安全に配慮すれば神経ブロック療法を行うことができます。効果もすぐに出るので、痛みから解放されて寝たきりになるのを防げます。